

フィールディングの小説に見られる スクリブレルスの風刺

福 本 宰 之

序章 スクリブレルスの風刺の特徴

フィールディング（Henry Fielding）が風刺的な芝居を書くに当たって、Scriblerus Secundus の偽名を用いたことはよく知られている。これは、言うまでもなくポープ（Alexander Pope）、スウィフト（Jonathan Swift）、ゲイ（John Gay）らを中心メンバーとし、術学的な嗜好や似非学問を揶揄する目的で設立された文学サークル、スクリブレルス・クラブを意識した名前である。では、これ程フィールディングに影響を与えたこのクラブの風刺とは、そもそもどのような特徴を有していたのだろうか。パワー（Henry Power）はその著書において、クラブから生み出された風刺作品の中心的特徴として以下の3点を挙げている。原文の説明はやや長いので、以降本論で展開する議論との関連で、要点を絞って載せておく。

1. 古代ギリシア文学と古代ローマ文学の偉大な作家たちが保持し続ける価値への信奉。その意味で、当時ホメロス（Homeros）の価値が貶められていたことは、クラブのメンバーにとって、看過できない由々しき事態であった。彼らにとって古代ギリシア・ローマの文学とは、自らの作品を評価する上で、重要な基準点となるべきものであったのだ。テキストに含意された古代ギリシア・ローマの世界と18世紀の同時代の比較を読み解くことは、クラブの風刺作品を読む経験の一部である。
2. クラブのメンバーは文学の商品化という風潮に対し、強い不快感を覚えていた。彼らの作品はハモンド（Brean Hammond）が「文学市場の成長により引き起こされた混乱」と呼んだものに対する反発であった。大理石のようにいつまでも色褪せない古代芸術に対する彼らの傾倒が、粗雑でその場限りの印刷文化の台頭によって試練に晒されていたのである。

3. クラブのメンバーは、スウィフトが定義する意味での銜学を嫌悪していた。すなわち我々が持つと自負する知識を過大に誇ることである。貨幣学や古代の料理本を人文学の伝統よりも上位に置くような同時代の学識は常に風刺的となった。この嫌悪感こそ、まさしくマーティナス・スクリブレウスを生み出した原動力であり、ポウプの『ダンシアッド』(*The Dunciad*)⁽¹⁾に付された、読む者を圧倒する注釈という発想の元となったものである。

なおパワーは続けて、フィールディングは文学の商品化に対する危機感(上記2.の視点)をクラブと共有しつつ、一方でそれを乗り越えようと奮闘し、『アミーリア』(*Amelia*)や『トム・ジョーンズ』(*Tom Jones*)といった散文作品に、文学の商品化に適合した叙事詩の可能性を見ようとしたと主張する。⁽²⁾

フィールディングにおけるスクリブレウスの風刺の影響を跡付けようとすると、最も強く感化されたクラブ・メンバーはポウプであることが明らかになる。以下に触れる演劇作品のみならず、小説においてもポウプと風刺対象が重なる箇所や、はっきりとポウプの名に言及している箇所が散見され、詩人に対するフィールディングの思い入れの深さが伺える。⁽³⁾

1737年の検閲令により、演劇の世界から手を引いたフィールディングは、リチャードソン(Samuel Richardson)の『パミラ』(*Pamela*)のパロディーである『シャミラ』(*Shamela*)を1741年に出版し、最初の本格的な小説である『ジョウゼフ・アンドルーズ』(*Joseph Andrews*)を翌42年に出版したが、ポウプは直後の44年に亡くなっており、おそらくポウプはフィールディングを小説家ではなく劇作家として見ていたと推測できる。フィールディングにしても、ポウプの影響がより直接的に看取されるのは、その演劇作品においてである。フィールディングは、ポウプの合注版『ダンシアッド』(*The Dunciad Variorum*)が出版された翌年に『オーサーズ・ファース』(*The Author's Farce*)を出版し、その時初めて冒頭で触れた *Scriblerus Secundus* という偽名を用いたのである。さらに演劇作品においては、シバー(Colley Cibber)やカール(Edmund Curll)、説教屋ヘンリー('Orator' John Henley)、あるいはイタリア・オペラなどが揶揄されており、『ダンシアッド』と風刺対象が重なる部分が多い。こうした事情が関係しているせいであろうか、従来、フィールディングの作品に見られるスクリブレウス・クラブの影響を論じる際には、芝居を俎上に載せるのが通例で、フィールディングの小説とクラブの関

係を論じた研究は意外に数が少ない⁽⁴⁾。その点パワーの著作は注目に値するものであるが、フィールディングの小説には、彼が指摘しているよりも、はるかに直接的なスクリブレ爾ス的風刺の発想が生かされているように思われる。本稿では、『トム・ジョーンズ』、『ジョウゼフ・アンドルーズ』そして『アミーリア』に看取されるスクリブレ爾ス的風刺について、パワーとは違う角度から光を当ててみたい。但し、前の二作に比べ、フィールディングの最後の小説となった『アミーリア』においては、スクリブレ爾ス的風刺の影響が小さい。以下の章では、まず先に挙げた3点のスクリブレ爾ス的風刺の特徴を念頭に置いて、『ダンシアッド』で扱われているテーマを整理し、次にフィールディングの作品においてそれらのテーマがどのように表現されているかを、順次論じていくこととする。

第1章 古代ギリシア・ローマ文学への傾倒

ポウプを含むスクリブレ爾ス・クラブのメンバーたちの作品に古代ギリシア・ローマ作家への傾倒が伺えるのは、今更言うまでもない。そもそも、彼らが駆使したmock-heroicという技法は、読み手に古代の叙事詩についての蘊蓄があつてこそ成立するものであるし、スウィフトの『書物戦争』(*The Battle of the Books*)での古代派に対する扱いや、ポウプが『批評論』(*An Essay on Criticism*)で見せるホメロスへの絶対的信頼などがその根拠として挙げられよう。その一方で、パワーが1.で指摘する、古典文学の扱いに対する彼らの憤りがはっきりと表現された箇所は、意外に数が少ない。敢えて例を求めるとすれば、『ダンシアッド』におけるブラックモア(Richard Blackmore)に対する揶揄であろう。第2巻の騒音競争に登場したブラックモアは、その朗々たる歌声故に本文で“All hail him victor in both gifts of song, / Who sings so loudly, and who sings so long.”(267-68)⁽⁵⁾と称えられる一方で、この箇所に自ら付した擬注において、ポウプは「ブラックモア氏の的を射た性格である。氏は(ドライデン氏が表現したように)馬車の車輪がゴロゴロとうなる音に合わせて詩作し、その疲れを知らぬ詩神は6篇もの叙事詩を生み出した。すなわち、『アーサー王子』と『アーサー王』合わせて20巻、『イライザ』10巻、『アルフレッド』12巻、『救い主』6巻、加えてフォリオ版の『ヨブ記』…」(“A just character of Sir Richard Blackmore, Kt. who (as Mr. Dryden express'd it) Writ to the rumbling of his Coach's wheels, and whose indefatigable Muse produced no less than six Epic poems: *Prince and King Arthur*, 20 Books; *Eliza*, 10;

Alfred, 12; *The Redeemer*, 6: besides *Job* in folio,...”)と解説する。つまりここでは叙事詩を次々に生み出す作家ブラックモアの多作さが、その歌声の並外れた持久力として揶揄されているのである。擬注でドライデン (John Dryden) の言葉として引かれている“*Writ to the rumbling of his Coach's wheels*”は、医師でもあったブラックモアが患者を往診する合間を縫って馬車で移動中に詩作をしたという彼の証言⁽⁶⁾に言及したものである。しかも、そのドライデン自身は叙事詩を「…間違いなく、人間の精神が生み出し得るもっとも偉大な作品」 (“...undoubtedly the greatest Work which the Soul of Man is capable to perform”⁽⁷⁾)と称しているのである。つまりここで槍玉に挙げられているのは、本来文学作品の最高峰に位置付けられるはずの叙事詩を、片手間に量産するブラックモアの創作姿勢なのである。そして彼のこのような振る舞いが、1.で指摘されている、古代ギリシア・ローマ文学への敬意の欠如として捉えられたのである。

一方、フィールディングの小説においても、パワーが指摘する三つの特徴のうち、最も際立っているのは1.であろう。三作の小説全てにおいて、時に話の流れを中断してまで登場人物たちが饒舌に展開する、『オデュッセイア』(*The Odyssey*)、『イリアス』(*The Iliad*)、『アエネイス』(*The Aeneid*)を中心とする古典文学談義は、それだけで古代ギリシア・ローマ文学に対する作者の敬意を十分に示すものである。むしろ1.との関連で注目すべきは、こうした古典文学に対する素養を必須の知識として読者側にも求めるフィールディングの姿勢であろう。例えば『ジョウゼフ・アンドルーズ』の序文において、この作品では乱闘シーンの描写や他の箇所⁽⁸⁾で古典叙事詩のパレースクが用いられていることを認めた上で、それらについては「…古典文学の読者には必ずしも指摘する必要もない。ここでのパロディーや茶化しは、主にそうした読者に向けて意図されているのだから」 (“...not necessary to be pointed out to the Classical Reader; for whose Entertainment those Parodies or Burlesque Imitations are chiefly calculated.”⁽⁴⁾)と述べ、あくまで自らの作品が古典世界を共有する者たちを想定して書かれたものであることを謳う。

同種の趣向は『トム・ジョーンズ』第4巻第8章においても見られる。ここでは、ソファイアから譲り受けたお洒落なガウンを身に纏いモリーが教会に出かけたことから、同じ身分の人間の反感を買い、男女入り混じっての大乱闘へと発展するのだが、章の冒頭に付した梗概でフィールディングは「ホメロス流の文体で詩神により歌われる戦闘で、古典文学の読者のみが味わえるもの。」

（“A Battle sung by the Muse in the Homeric Stile, and which none but the classical Reader can taste”(1: 177)）と述べている。そして実際に、この章では叙事詩の戦闘場面に相応しい大仰な表現は言うに及ばず、Museへのインヴェンションや戦場で斃れた英雄たちの名前の列挙など、叙事詩のコンヴェンションが踏襲されている。

また第9巻第1章においては、フィールディングはまず“foolish Novels”や“monstrous Romances”が横溢する同時代の現状を嘆く。その上で『スペクテーター』（*The Spectator*）を例にとり、その筆者がギリシア語とラテン語の題辞を各号の冒頭に掲げているのは、然るべき才能に欠ける「三文文士たちの追隨を防ごうという同じ配慮に端を発するもの」（“...from the same Consideration of guarding against the Pursuit of those Scribblers,...”(1: 488)）だと断じている。つまり古典語で書かれた文章を理解できない人間が同紙を模倣するなど不可能だからである。フィールディングが、古典語の素養の欠如を三文文士の目印として挙げているのは注目に値する。読者にギリシア・ローマ文学への造詣を想定していた彼が、作者には古典語の能力を求めているということになろう。また、引用文中にある“the same Consideration”とは、文字通りフィールディングも共有する「配慮」である。だとすれば、その後の“guarding against”には図らずもフィールディングの思いが現れていると言えよう。本物の作家としての自負を持つ彼は、常に三文文士から守るべき領域を意識していたのであり、それはポウプを筆頭にスクリブレルス・クラブのメンバーたちの自覚と重なる部分が多い。

第2章 文学の商品化に対する不快感

パワーが2.で指摘する風潮は、スクリブレルス・クラブのメンバーにとって、最も喫緊で最も憂慮すべきものであつただろう。クラブ名である「スクリブレルス」が元々“scribble”（「書きなぐる」）という語に由来することは、今更指摘するまでもない。芸術品から商品へと成り下がった文学作品は、商売の理屈に従って、内容よりもその嵩、ページ数に応じて価格が決定されるようになる。従って、クラブのメンバーが覚える「文学の商品化に対する不快感」も、作品の価値を質ではなく量で決定しようとする態度への揶揄として表現されるようになる。最も典型的なのは、第2巻の最後の競技の冒頭で愚鈍⁽⁸⁾の女神が放つ言葉、“I weigh what author's heaviness prevails;”(368)であろう。この言葉を念頭に置いて、先に触れた『ダンシアッド』第2巻におけるブラックモアの

描かれ方に再度注目してみる。注釈の後半では彼の作品の量が強調されていることは容易に見て取れる。そして、これが「長々と歌う」(“who sings so long”)という本文の比喩が示すブラックモアの旺盛な著述意欲の結実として提示されていることも論を俟たない。さらにこれ以外の箇所でも、例えば「ブラックモアの際限なく続く詩行」(“Blackmore’s endless line” (I. 104))や「永遠に息が絶えないブラックモア」(“everlasting Blackmore” (II. 302))には、同じように、執筆に臨んで、質よりも量を優先させるブラックモアへの皮肉が込められている。

そしてこの「ブラックモアの際限なく続く詩行」と同じような着想の風刺が『トム・ジョーンズ』第5巻第11章にも見られる。ここではトムがスワッカムとブリフィルを相手に大立ち回りを演じるのだが、章の冒頭に付した梗概においてフィールディングは「本章では、ポウプ氏の長さ1マイルに及ぶ文の直喩に引き続き、あり得ないほど血生臭い戦いが描かれる…」(“*In which a Simile in Mr. Pope’s Period of a Mile, introduces as bloody a Battle as can possibly be fought...*”(1: 259))と述べている。ここで使われている「長さ1マイルに及ぶ文」(“*Period of a Mile*”)という表現は、『ダンの第4風刺詩の模倣詩』(*The Fourth Satire of Dr. John Donne, Dean of St. Paul’s, Versified*)の73行目で他ならぬポウプが用いているもので、ポウプはこの言葉で同時代人のホードリー⁽⁹⁾(Benjamin Hoadly)主教の冗長な文体に言及しているのである。そして梗概での予告を実践し、フィールディングはこの章を“As”で始め、丸々二段落に渡る直喩を続けた後、ようやく三段落目で“Thus, and more terrible... leap’d forth our Heroe.”と本題を述べるのである。つまり『トム・ジョーンズ』の読者は、実際に冗長な文を体験することで、「文学の商品化」がもたらした、質よりも量を重んじる同時代の風潮の弊害を体感するよう工夫されているのである。

フィールディングからの同じ趣旨の告発は、『アミーリア』の第8巻第5章にも見られる。「作家についての評言」(“*Comments upon Authors*”)と題されたこの章では、借金取りの家に拘留されたブースが、同じく借金が返済できなくなり拘留されている雑文作家と文学談義を交わす。この挿話はブースと主人公アミーリアに次々と降りかかる不幸を描く本筋の流れを中断し、やや唐突かつ強引に作品にねじ込まれている感があり、その点では『トム・ジョーンズ』の各巻冒頭に置かれた第1章と似ている。つまり、ここで語られる主張は作者フィールディングの強い意思が込められていると考えられる。まずは、クラブ

のメンバーであるスウィフトに対する賛辞、同じくボウプのホメロス訳に対する評価が語られ、具体的に古典文学からギリシア語、ラテン語のテキストが引かれ、その解釈をめぐる二人が意見を述べ合うなど、古典文学に対して二人が抱く深い蘊蓄と畏敬の念が強調される。ところが章の後半で、ブースの相手の作家は「最近詩を書くことは手控えている」という旨の告白をし、その理由を「脚韻は難しい。あれは厄介な代物だよ。野党の側に立った演説の草稿を書くよりも、一組のカプレットの脚韻を考え出すのに長くかかる時さえあった。演説の方こそ、国中で読まれて大きな称賛を浴びたというのに。」(“Rhimes are difficult Things; they are stubborn Things, Sir. I have been sometimes longer in tagging a Couplet, than I have been in writing a Speech on the Side of the Opposition, which hath been read with great Applause all over the Kingdom.”(329))と説明する。またその際に、文学作品に対するそうした扱いを「本屋にとっては、シート1枚はシート1枚に過ぎないからな。それが散文で書かれようが、韻文で書かれようが、全く違いはないのだ。」(“A Sheet is a Sheet with the Booksellers; and whether it be in Prose or Verse, they make no Difference:...”(329))と分析して見せる。この作家の言葉こそ、スクリブレルス・クラブのメンバーたちが抱いた危機感を端的に言い表したものであろう。

また「嵩、ページ数によって文学作品の価値が決定される」ことへの揶揄としては、『ジョウゼフ・アンドルーズ』の第2巻第1章を挙げることもできよう。「作家における区分けについて」(“Of Divisions in Authors”)と梗概に記されたこの章の冒頭で、フィールディングは文筆を生業とする者にしか知られていない、重要な商売上の秘密というものがあり、それは自らの著作を巻や章に区分けすることだと述べる。そして一般読者はこうした区分けを出来上がった著作の嵩を増やすための工夫に過ぎないと考え、仕立て屋が使う糊やコルセット、固定テープと同じで、完成品の価格を吊り上げることに役立っていると理解していると述べている(89)。ここでもさり気なく、文学作品を商品と捉え、質ではなく量に基づいて価値付けるようになった同時代の風潮が言及されている。同じような発想に基づいた風刺は『トム・ジョーンズ』第13巻第1章にも見られる。ここでフィールディングは「長きに渡って埃まみれの本棚で眠っていた重たく、読まれることもないフォリオ版の塊りも、汝の助言により、号に区分けされ、たちまち国中を駆け巡る。」(“By thy Advice the heavy, unread, Folio Lump, which long had dozed on the dusty Shelf, piece-mealed into Numbers, runs nimbly through the Nation.”(2: 684))と述べる。“heavy”

や“Folio”という言葉が示す書物の量感、“piece-mealed into Numbers”に示された売るための秘訣、さらに書物が一個の商品にまで貶められたことを示す“Lump”という言葉など、2.で示された懸念が凝縮された形で、表現された箇所であろう。また冒頭の“thy”は、引用はしていないが、“much plumper Dame”に呼びかけたものである。興味深いことに、ウェズリヤン版の編者バテスティン（Martin C. Battestin）は、この“Dame”と『ダンシアッド』の愚鈍の女神との類似を指摘している。その上で、バテスティンは「フィールディングの「よりふくらした」女神は混沌と夜の娘ではなく、儲けと商売の娘であり、彼女自身のお気に入りの住まいはグラブ街なのだ…」（“Fielding’s ‘plumper’ goddess is the daughter not of Chaos and Night, but of Gain and Trade; and her own favourite seat is Grub-Street,...”（2: 684））と述べ、区分けというやり口が文学作品を商品と見なす三文文士連中の常套手段であると訴えるフィールディングのメッセージを読み込んでいる。

さらに興味深いことに、フィールディング自身が、一人の作家としてこうした悪弊を利用することで、それを顕在化させている箇所も見られる。『ジョウゼフ・アンドルーズ』第1巻第15章の最後から2つ目の段落の冒頭において、唐突に「虚栄」（“Vanity”）へ呼びかけ、ひとしきり「虚栄」の何たるかについて長広舌をふるった後、最終段落において、今度は「この脱線が気まぐれな戯言だと読者が非難するようお前が仕向けても、私は全く良心の痛みを感じないであろう」（“...; nor will it give me any Pain, if thou should’st prevail on the Reader to censure this Digression as errant Nonsense:...”）と開き直り、さらに続けて「というのも、お前は戸惑うことになるが、これだけは知っておけ。私がお前の話題を持ち出したのは、短い章を長く引き延ばすために他ならないのだ。」（“...: for know to thy Confusion, that I have introduced thee for no other Purpose than to lengthen out a short Chapter:...”）（70）と締め括っているのである。

さて2.に関連して「いつまでも色褪せない古代芸術」の対極としての「粗雑でその場限りの印刷文化」に対するポウプの警戒心は、主に新聞や雑誌といった定期刊行物の台頭に向けられる。彼がなぜ定期刊行物の隆盛を憂慮していたのかについては、用いられる文体の問題やその出版形態などの理由があるのだが、それらに関しては別の場所で論じたことがあるので、ここでは深入りしない。⁽¹⁰⁾以下、定期刊行物のその場限り性に視点を限って論じていく。この点について、『ダンシアッド』第2巻の飛び込み競争の場面に以下のような箇所

がある。

Next plung'd a feeble, but a desp'rate pack,
With each a sickly brother at his back:
Sons of a Day! just buoyant on the flood,
Then number'd with the puppies in the mud.

(II. 305-08)

ここは、当時の日刊紙 *The Daily Courant* に言及した箇所、引用 2 行目はこの新聞が費用節減のために、一枚の紙に表裏両面印刷されていた事実を茶化したものである。⁽¹¹⁾ 注目すべきは、次の行の“Sons of a Day!” という呼び掛けである。無論表面的には、*The Daily Courant* が日刊紙であることに言及したもののだが、そこには「わずか一日しか命脈を保てず、以降は全く読まれない」という含みがある。だからこそ、水に飛び込む前から「か細く」(“feeble”)「病気がち」(“sickly”) で「その後、泥だらけになって仔犬の死骸と一緒にいる。」

(“Then number'd with the puppies in the mud.”) と表現されているのである。つまり、この 4 行には定期刊行物のその場限り性を揶揄する色合いが濃いのだ。そして定期刊行物の宿痾とも言うべき、このその場限り性こそが、新聞が「いつまでも色褪せない古代芸術」の対極と目された原因なのである。

それでは、翻ってフィールディングの作品に目を向けてみる。新聞に対する軽侮は、例えば『アミーリア』第 8 巻第 2 章にも見られる。先にも紹介したように、借金が返せないためにブースは借金取りの家に拘留され、同じくそこに拘留されている貧乏文士の所業を聞かされる。この男は、小遣い稼ぎのためなら歴史書でも詩でも書く、いわゆる売文家なのだが、最後にいい加減な内容の新聞記事を書いていることを告白するのである。さらに、『トム・ジョーンズ』においては、フィールディングの新聞に対する見方が最もはっきりと表される。第 2 巻第 1 章で、まず筆者はこの小説の執筆方針を読者に説明するのだが、その際に毎号の記事の分量を揃えるために、たとえ特筆すべき事件が起こらない期間でも、それなりに紙面を埋めなければならない新聞のような真似はしない、と宣言する (1: 75)。つまり、この小説では書くべき出来事が起こらなかった年月については思い切って端折り、話を先に進めるという意味である。このように前もって宣言しておいた上で、次の第 3 巻第 1 章でフィールディングは再びこの話題を持ち出す。つまり筆者である自分が、書き記すべき出来事

がなく飛ばすのが相応しいと考えた歳月にも、定期刊行物に載る程度の重要性を帯びた出来事なら起こっているのであるが、そうした記事を長い時間をかけて読んでも、大多数の人はほとんど何も得るものがない、というのである (1: 117)。定期的に刊行されるが故に、薄っぺらな内容で、その場凌ぎで書かれた消費されるべき記事と、あくまで芸術家としての誇りを持って書かれた自らの作品の間に一線を画さんとする、フィールディングの意思が読み取れる。

第3章 銜学に対する嫌悪

3. で述べられている特徴は、風刺詩『ダンシアッド』の読者がまず読み取るものであろう。ここで「我々が持つと自負する知識を過大に誇る」と説明されている悪弊は、『ダンシアッド』においては、「室内に閉じこもって読書することから得た知識のみで事足れりとし、屋外での経験や観察および他人との交際から得られる教訓や知恵を軽視する態度⁽¹²⁾」として描かれている。この点については、例えばこの詩の第4巻でウェストミンスター校の校長であるバズビー (Richard Busby) が、自らの教育信条を “Since Man from beast by Words is known, / Words are Man's province, Words we teach alone.” (IV, 149-50) と謳っている点に最も象徴的に表れているし、先に触れた合注版『ダンシアッド』の冒頭で全体の主題が “Books and the Man I sing,…” (I, 1) と紹介されているのも示唆的である。

『ダンシアッド』で描かれた愚物をこうした視点から捉えた場合、フィールディングの小説において、最もこの資格に適うのは、『ジョウゼフ・アンドルーズ』のアダムズ牧師であろう。例えばこの作品第2巻第16章で、旅先でとある紳士と意気投合したアダムズが、その紳士から突然年300ポンド以上の聖職禄と家畜と土地つきの邸宅、さらにこれから旅を続けるに当たって馬車まで提供する、との申し出を受ける場面がある。ところが、これらは全て出まかせで、真に受けたアダムズはまんまと騙されていたのである。一方作中で、アダムズのこうしたナイーブさをより際立たせるための引き立て役を担っているのが、主人公ジョウゼフなのである。彼はこの紳士についてアダムズに「初めて会ったのに、あんなに親切な申し出をするのを聞いていて、私はあまりいい気持がしませんでした。というのも、ロンドンにいる私の同業者たちが自分のご主人様について、あの手の話をするのを何度も聞いてきましたから。」 (“I was never much pleased with his professing so much Kindness for you at first sight: for I have heard the Gentlemen of our Cloth in *London* tell many such

Stories of their Masters.”(176)) と述べる。つまりジョウゼフは自らの実体験から件の紳士の胡散臭さを最初から見抜いていたのである。ところがそれに対し、アダムズは「人間についての知識は書物を通してのみ得られるのだ。」

（“Knowledge of Men is only to be learnt from Books...”(176)）と語り、あくまで知識の源泉として書物の重要性を訴えるのだが、⁽¹³⁾ジョウゼフは、「…私に言えるのは、同業者の間では、あれこれ約束してくれるご主人様に限って、実行してくれることは少ない、というのが常識だということです。」（“... all I know is, it is a Maxim among the Gentlemen of our Cloth, that those Masters who promise the most perform the least...”(176)）と答え、自らの実体験から得られた知恵を多とする。

そしてジョウゼフとアダムズのこうした考え方のずれは、学校制度をめぐる両者の意見の相違という形を取って現れることとなる。第3巻第5章⁽¹⁴⁾において、二人は若者に理想的な教育を施すのはパブリック・スクールか私塾かをめぐって議論する。アダムズは私塾を、ジョウゼフは自らの主人であるブービーを典拠としてパブリック・スクールを支持する。（ちなみに、論争を始める前にジョウゼフが「あなたは世間から我々の州において、最高の学校教師と認められているに違いない。」（“... you must be allowed by all the World to be the best Teacher of a School in all our County.”(230)）とアダムズを持ち上げたのに対し、彼が「その通り。確かに、私はそう目されているし、そう自負しても自惚れていることにはならないだろう—それどころか、隣の州に行ってもきっと同じことだろう。」（“Yes, that,... I believe, is granted me; that I may without much Vanity pretend to—nay I believe I may go to the next County too...”(230)）と答えているのは、3. で挙げられている「我々が持つと自負する知識を過大に誇ること」という銜学の定義にぴったりと当てはまるであろう。）そしてジョウゼフはパブリック・スクールをより好ましい教育機関とする根拠として「というのも、大規模な学校は社会のミニチュア版だからです。幾分なりとも観察力のある子なら、後になって一般社会で目にするものを、学校においてミニチュア版で見るだろうからです。」（“..., for great Schools are little Societies, where a Boy of any Observation may see in Epitome what he will afterwards find in the World at large.”(230-31)）というブービーの言葉を引き合いに出す。これは明らかに、卒業後に実社会のしくみや暗黙のルールに戸惑うことがないよう、予めミニチュア版でそれらを経験しておく場としての学校の機能を重視したものである。一方アダムズは“...; for that very Reason,... I

prefer a private School, where Boys may be kept in Innocence and Ignorance: ...” (231) と延べ、ジョウゼフの主張を一蹴し、ダメ押しとして書物から学んだ芝居の一節を引用するのである。

一方『トム・ジョーンズ』においては、この「室内に閉じこもって読書することから得た知識のみで事足りるとし、屋外での経験や観察および他人との交際から得られる教訓や知恵を軽視する」ことを戒めようとする姿勢は、作者の意見や考察を述べる目的で各巻の冒頭に付された章において表明されている。この点、『ジョウゼフ・アンドルーズ』よりも、フィールディングの主張がより明確に示されていると言える。例えば第9巻第1章においては、“..., there is another Sort of Knowledge beyond the Power of Learning to bestow, and this is to be had by Conversation.”(1: 492) と、机に齧り付いて学ぶのではなく、人と交わることを通して得られる知識が存在することが説かれる。これは社会をミニチュア版で経験しておく場としてのパブリック・スクールの機能を退け、より小人数の私塾を理想の教育機関としたアダムズの考えを否定するものである。さらに続けてフィールディングは「この知識は人の性格を理解するのに非常に肝要であり、その一生を学寮に閉じこもるか、書物に囲まれて過ごす銜学者ほど、人の性格に無知な者はいないのである。」(“So necessary is this to the understanding the Characters of Men, that none are more ignorant of them than those learned Pedants, whose Lives have been entirely consumed in Colleges, and among Books...”(1: 492)) と述べる。ここで描かれた「銜学者」(“learned pedants”) が、先に挙げた『ダンシアッド』の愚物たちに見られた態度を共有していることは言を俟たないであろう。ちなみに『ダンシアッド』第3巻では以下のような箇所がある。

“But who is he, in closet close y-pent,
Of sober face, with learned dust besprent?”
“Right well mine eyes arede the myster wight,
On parchment scraps y-fed, and Wormius hight.

(185-88)

使用されている英語が古風で読みづらいが、正にその読みづらさこそ、ここでの風刺の真骨頂である。トゥイックナム版でこの箇所が付された注釈と OED を参照にしながら、簡単に解説を加えておくと、まず“y-pent”とは現代英語の

“pent”の意。同じく“besprent”は“besprinkled”、“arede”は“read”、“myster wight”は“uncouth mortal”、“hight”は“was called”の意味である。つまりここは「狭い書庫に閉じこもり」(“in closet close y-pent”)、「学術書の埃にまみれながら」(“with learned dust besprent”)、「羊皮紙の断片」(“parchment scraps”)に書かれた古文と格闘する学者の姿を、その研究対象に相応しい古い英語を用いて戯画化しているのである。そして、世間との交わりを断ち、狭い世界に閉じこもるこの学者の有り様は、先の『トム・ジョーンズ』において描かれた銜学者の姿を彷彿とさせる。

『トム・ジョーンズ』に関して興味深いのは、このように「他人との交わりを避け、部屋に閉じこもってひたすら書物を読み耽る」ことを戒める姿勢が、さらに進められて「屋外に出て自然を観察せよ」という教訓にまで昇華されている点である。そしてこの教訓こそ、スクリブレルス・クラブ設立直後に出版された『ウィンザーの森』のテキストに、作者ボウズが密かに忍ばせたものであった。⁽¹⁵⁾例えば先に『トム・ジョーンズ』の第9巻第1章から引用したが、その直後で当時の著名な庭師ミラー (Philip Miller) の「書物から得た知識のみでは不十分で、庭に出て実際に植物を観察することが肝要」という教えを紹介している (1: 492-93)。また第8巻第15章では「…どんな昆虫であっても、どんな植物であっても、被創造物の中の位階が低過ぎて、自らの偉大な創造主の属性の印を授けられていない、ということはない。それは創造主の力のみならず、その知恵と善良さの印なのだ。」 (“... there is not an Insect, not a Vegetable, of so low an Order in the Creation, but it is honoured with bearing Marks of the Attributes of its great Creator; Marks not only of his Power, but of his Wisdom and Goodness.” (1: 484)) と述べて、屋外の動植物を観察することで、そこに秘められた神の意志を読み解くことの重要性が説かれている。

同じ発想は『アミーリア』第4巻第8章にも見られる。ここでは貧窮した退役兵士に税金から年金が支払われることの妥当性について語られ、その際に比較対照すべき自然界の存在として「一般民衆の好意にすぎる価値や資格を少しも持ち合わせておらず、ハチの巣の利益に如何なる点でも貢献することなく、勤勉なハチの労働のおかげで贅沢な暮らしをしている一団の雄バチ」 (“... a Set of Drones, who have not the least Merit or Claim to their [the Public's] Favour; and who, without contributing in any manner to the Good of the Hive, live luxuriously on the Labours of the industrious Bee.” (188)) が持ち出されている。バステインが指摘するように、ミツバチの社会と人間社会との

間にパラレルを見出そうとする発想は、マンデヴィル (Bernard de Mandeville) の『蜜蜂の寓話』(*The Fable of the Bees*) やヴェルギリウス (Publius Vergilius Maro) の『農耕詩』(*The Georgics*) の伝統を引き継ぐものであろう。但し、そこには、直前で述べた庭師ミラーの教えと同じく、屋外に出て自然を観察することで学べというメッセージが読み取れる。

第4章 結語

ポウプとフィールディングはその風刺理念において繋がっている。例えば『ジョウゼフ・アンドルーズ』第3巻第1章において、フィールディングは読者に「ここできっぱりと宣言しておくが、私が描くのは人間ではなく風習だ。個人ではなく、類なのだ。」(“... I declare here once for all, I describe not Men, but Manners; not an Individual, but a Species...”(189))と語り、作中の登場人物がどれほど実在の人間に似てようと、作者の意図は特定の個人を揶揄することではなく、あくまでその「個」が代表する「類」を矯めようとするものであると宣言する。つまり、あるべき風刺家の役割を「憐れむべき一人の卑劣漢を、範囲が狭く取るに足らない顔見知りの一団に暴くことではなく、大勢の人間が自らの欠陥について考え、それを減らすように仕向けるために、私室にいる彼らに鏡を向けてやることだ」(“...; not to expose one pitiful Wretch, to the small and contemptible Circle of his Acquaintance; but to hold the Glass to thousands in their Closets, that they may contemplate their Deformity, and endeavour to reduce it...” (189))と説き、単なる誹謗者と風刺作家の間に一線を画すのである。そしてフィールディングのこの風刺哲学は、ポウプのそれと重なる部分が大きい。ポウプは1734年にアーバスノット (John Arbuthnot) に宛てた手紙において、「悪徳が蔓延している時代に、漠然とした風刺は効力がありませんし、人を罰することもできません。同じ穴のムジナがこれほど多くいるので、人はそれを恥だと感じなくなったのです。群れから一頭二頭狩り出すことによってのみ、幾分かの見せしめに行うことができるのです。」

(“...General Satire in Times of General Vice has no force, & is no Punishment: People have ceas'd to be ashamed of it when so many are joind with them; and tis only by hunting One or two from the Herd that any Examples can be made.”)⁽¹⁶⁾と述べている。彼もまた個人を特定しない「類」全体を視野に入れた「漠然とした風刺」(“General Satire”)が効力を持たないことを指摘した上で、「類」から「個」を取り出すことで(“by hunting One or two from the

Herd”）、「類」全体の見せしめとする（“any Example can be made”）ことの有効性を説いているのである。

フィールディングとポウプの関係について興味深いのは、フィールディングはポウプについて度々作品の中で言及し、その存在をはっきり意識しているのに対し、後者はフィールディングについて、作品の中はもとより手紙においてもほとんど触れていない、という点である。20歳近くの年齢差があるとは言え、両者は風刺作家として活躍した時期が重なっており、若干奇異な感じがする。その理由はともかく、専らフィールディングがポウプから影響を受けるのみで、その逆はなかったと考えられる。先輩作家の風刺理念に共感したことで、フィールディングは演劇作品においてスクリブレルスの衣鉢を継いだ。さらにその後、風刺作家ポウプの抱いた危機感や懸念は、そのままフィールディングの小説にも目立たない形で取り込まれるのである。従って、そこに込められた微妙な諷意を読み取るためには、ポウプによる風刺の視点をも併せ持つことが必要であろう。

注

(1) *Epic into Novel*, 37-38.

(2) *Epic into Novel*, 43-44.

(3) 例えば『ジョウゼフ・アンドルーズ』第3巻第2章では、アダムズ、ジョウゼフ、ファニーが偶然立ち寄った家の主人が、アダムズが本当に聖職者かどうか確かめる意図で「ポウプ氏は最近何か新作を発表したか？」（“... if Mr. Pope had lately published any thing new?”(196)）という質問を彼に投げかける。聖職者としての教養を試す試金石としてポウプの名が持ち出されていることが、ポウプに対するフィールディングの傾倒ぶりを伺わせる。また『トム・ジョーンズ』においては、作品の冒頭第1巻第1章において早くもポウプの『批評論』（*An Essay on Criticism*）から、詩人による“wit”の定義が引用されている（1: 33）。さらに同じ作品の第7巻第12章には、道に迷ったトムが一夜の宿を求めたパブに、偶然兵士たちの一団がやって来る場面がある。そこで、彼らと意気投合したトムが発したトロイ戦争に言及した言葉を受けて、中尉が連隊旗手のノーザートンに「おそらく、君はポウプ訳のホメロスを読んだことはないだろうが」（“... perhaps, you never read *Pope's Homer*...”(1: 372)）と切り出し、続けてポウプのホメロスについての蘊蓄を語り出す。この辺りにも、フィールディングのポウプに対する敬意が感じられる。同じポウプ訳のホメロスへの言及は、第6巻第2章（1: 277）や第8巻第5章（1: 421）にも見られる。

なお本稿で言及、引用するフィールディングの作品については、すべて *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding* に依る。引用箇所については、この注釈のように、本文で掲載ページのみを末尾に付す。個々の作品のより詳細

な書誌情報については「参考文献」を参照のこと。

- (4) 例えばフィールディングについて一般的な情報を与えてくれる2冊の概説書、Martin C. Battestin, *A Henry Fielding Companion* (Westport: Greenwood Press, 2000) と Claude Rawson, ed., *The Cambridge Companion to Henry Fielding* (Cambridge: Cambridge UP, 2007) を繕いてみても、前者は“SCRIBLERUS CLUB”の項目(130-01)の下で作家とクラブの関係を論じているが、専ら演劇作品しか触れていないし、後者も“Fielding's theatrical career”と銘打った第2章(24-29)で彼の演劇作品がクラブの影響を被っていることを跡付けているのみである。
- (5) 『ダンシアド』のテキスト、行数については、John Butt, gen. ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11 vols. (London and New Haven: Methuen and Yale UP, 1939-69)の第5巻James Sutherland, ed. *The Dunciad* (1963)に収められた、4巻構成の*The Dunciad* (B)に依拠する。
- (6) “Prologue to *THE PILGRIM*”において、ドライデンはブラックモアに言及して、

At leisure Hours, in Epique Song he deals,
Writes to the rumbling of his Coaches Wheels,

(41-42)

と述べている。なおテキストはJames Kinsley, ed., *The Poems of John Dryden*, 4 vols. (Oxford: Clarendon Press, 1958)に依る。

- (7) “Dedication to *Aeneis*,” (*Poems* 3: 1003)
- (8) この辺りの議論については、拙論「『ダンシアド』における書物の量感をめぐる風刺—ブラックモアを手がかりに—」(『*Albion*』復刊37号、京大英文学会、1991年)を参照。
- (9) バテスティン(Martin C. Battestin)の注釈参照(1: 259)。
- (10) 拙論「『ダンシアド』で描かれた三文文士の出自」(『龍谷大学論集』第493号、龍谷大学龍谷学会、2019年)を参照。ただそこでも指摘したが、ポウプ自身何度か新聞に寄稿しており、彼が全面的に定期刊行物の存在を否定していたとは考えられない。ましてやフィールディングは自ら*The Champion*をはじめ、幾つかの定期刊行物を編集、発刊しており、この種の出版物に対する態度はアンビヴァレントなものにならざるを得ないだろう。ただ二人に共通しているのは、定期刊行という出版形態が孕む危険性を認識した上で、自分が書くまたは自分が責任を持つ記事に関しては、凡百の物書きのそれとは違うのだという矜持を抱いていた点であろう。
- (11) 306、307行目にポウプ自身が付した擬注、および編者サザランドの注を参照。
- (12) この点については拙論「英詩に見られるナチュラリスト的視点—ドライデン、ポウプ、王立協会、蜜蜂—」(龍谷紀要第29巻第1号、2007年)を参照。
- (13) さらに、次の第17章においても“I will inform thee; the travelling I mean is in Books, the only way of travelling by which any Knowledge is to be acquired.”(182)と、アダムズは同趣旨の発言している。

- (14) 原文では“private School”となっている。これは「私立学校」という意味ではなく、原文の文脈からも明らかなように、世間一般から広く生徒を集め、大人数のクラスで教育を施す“public School”に対し、厳選した少人数を教育する機関という意味で使われている。この点で、朱牟田夏雄が用いている「私塾」という訳語が的を射たものであろう。
- (15) この点で、一読毛色が違うという印象を受ける『ウィンザーの森』と『ダンシアド』は実は相補的な関係にある。また『ウィンザーの森』で謳われているこの教訓が、当時流行したナチュラリ・ヒストリーに典型的に見られる新しい科学精神の影響を受けていることについては、先に注釈で触れた拙論「英詩に見られるナチュラリスト的視点—ドライデン、ポウプ、王立協会、蜜蜂—」を参照のこと。
- (16) *Correspondence*, 3: 423.

参考文献

- 澤田孝史『ヘンリー・フィールディング伝』 春風社 2010年
 朱牟田夏雄訳『トム・ジョーンズ』全4冊 岩波文庫 1951-55年
 ———.『ジョウゼフ・アンドルーズ』全2冊 岩波文庫 2009年
 福本幸之「英詩に見られるナチュラリスト的視点 —ドライデン、ポウプ、王立協会、蜜蜂—」『龍谷紀要』第29巻第1号 2007年 61-74.
 ———.「『ダンシアド』で描かれた三文文士の出自」『龍谷大学論集』第493号 龍谷大学龍谷学会 2019年 88-111.
 Battestin, Martin C. *Henry Fielding: A Life*. London and New York: Routledge, 1989.
 ———. *A Henry Fielding Companion*. Westport: Greenwood Press, 2000.
 Dryden, John. *The Poems of John Dryden*. Edited by James Kinsley. 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 1958.
 Dudden, Homes. *Henry Fielding: His Life, Works, and Times*. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1952.
 Fielding, Henry. *Joseph Andrews*. Edited by Martin C. Battestin. Middletown: Wesleyan UP, 1967. (In *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*.)
 ———. *The History of Tom Jones: A Foundling*. Edited by Martin C. Battestin and Fredson Bowers. 2 vols. Middletown: Wesleyan UP, 1975. (In *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*.)
 ———. *Amelia*. Edited by Martin C. Battestin. Middletown: Wesleyan UP, 1983. (In *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*.)
 ———. *The History of Tom Jones*. Edited by R. P. C. Mutter. London: Penguin Books, 1985.
 ———. *Amelia*. Edited by David Blewett. Middlesex: Penguin Books, 1987.
 ———. *Joseph Andrews and Shamela*. Edited by Douglas Brooks-Davies. Oxford: Oxford UP, 1999.

- Paulson, Ronald and Thomas Lockwood, eds. *Henry Fielding: The Critical Heritage*. London and New York: Routledge, 1969.
- Pope, Alexander. *The Correspondence of Alexander Pope*. Edited by George Sherburn. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1956.
- . *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. Gen. ed. John Butt. 11 vols. London: Methuen; New Haven: Yale UP, 1939-69.
- Power, Henry. *Epic into Novel: Henry Fielding, Scriblerian Satire, and the Consumption of Classical Literature*. Oxford: Oxford UP, 2015.
- Rawson, Claude, ed. *The Cambridge Companion to Henry Fielding*. Cambridge: Cambridge UP, 2007.

キーワード : Alexander Pope, Henry Fielding, Scriblerus Club